

## 5 学生の受け入れ

### 進捗状況報告

<p><b>【5.0.1 入学者受け入れ方針】</b> 伝道者や社会に奉仕できる人材の育成には、幅広い学修や入学者の多様性が必要であり、受入方針に関しても、AO入試ほかのあり方についてさらに検討が進められている。 また、2004年度以降入学生の追跡調査は、学生主任・教務主任を中心に、受入方針や選抜方法、修学状況等について2007年度に実施することを決定している。また合否判定に係る客観的なデータを整えつつある。 キリスト教思想・文化コースへの志願者の受験機会の拡大のためには、以下のような方向が考えられる。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 大学全体の高大連携の方策の一環として、2007年度入試（2006年度実施）より、キリスト教神学・伝道者コースの学生だけを受け入れてきた推薦入試制度を見直し、協定校については、キリスト教思想・文化コースの選択を可能とした。</li><li>2. 多様な選考方法による学生受け入れを目指して、2008年度入試（2007年度実施）から、F方式、A方式、学部独自入試、並びに大学入試センター試験を利用した入試（1月出願）を導入する予定で、準備をしている。</li><li>3. スポーツの能力に優れた学生を対象とした入試を、2007年度（2006年度実施）より実行している。</li></ol>
<p><b>【5.0.2 学生募集方法、入学者選抜方法】</b> 定員管理の点から、また入試形態の多様性をはかるため、F方式、A方式、学部独自入試、並びに大学入試センター試験を利用した入試（1月出願）の導入を検討しており、2008年度入試から実施する。スポーツ能力に優れたものを対象にした入試方法も実施している。</p>
<p><b>【5.0.3 入学者選抜の仕組み】</b> 従来より、試験毎に実行小委員会を設けて、実行している。その際、全教員がまんべんなく試験実施に携わるよう留意され、それによって、入学者選抜上の課題が全教員によって共有される結果となっている。合格判定は、教授会によって合意された基準によっており、見直しの必要がある場合、入試検討委員会での議論を経て、教授会で決定している。</p>
<p><b>【5.0.5 アドミッションズ・オフィス入試】</b> AO入試の書類評価の基準については、実施後4年を経たので、さらに改善が求められる。入試検討委員会において今後も継続的に検討する。志願者の確保のために、さらに入試広報を充実することがまず行われるべきである。その際、選考における提出書類・小論文の割合が大きいので、広報において、どのような点が評価されるのかを明確に情報を提供し、書類の準備を支援するように配慮し、志願しやすいようなあり方を考える。 また基礎学力の担保のために、現在、行われている判断基準以外に、他の尺度を導入するかを検討する。</p>
<p><b>【5.0.7 入学者選抜における高・大の連携】</b> 従来から行っている指定校推薦入試に加え、大学全体の方針の下、協定校からの受け入れも行っている。その際、2006年度まではキリスト教神学・伝道者コースにのみ限定してきた募集を、一部ではあるが、キリスト教思想・文化コースにも拡大した。</p>
<p><b>【5.0.8 社会人学生の受け入れ】</b> 基礎学力の担保の問題は、AO入試の改善としてあわせて対策を検討したい。社会人の受け入れの機会の複数化は、入試の実施体制の負担と勘案しつつ、今後も検討を続ける。</p>
<p><b>【5.0.9 科目等履修生、聴講生等】</b> 生涯学習への関心の高さから、神学部においては、多くの科目等履修生、聴講生が授業を履修している。ただ受講者の希望で履修するのではなく、学習意欲を触発するために、ある目的を明確化した学習過程（ディプロマ・コース）を定めて企画することの可能性とあわせて、教務主任を中心に検討する。</p>
<p><b>【5.0.10 外国人留学生の受け入れ】</b> 教務主任および学生主任を中心に、修学面および生活面の適切な支援のためのあり方を検討しているが、現在は少人数の学部の特性を生かし、個別に学生との面談を行うなどの方法で支援を行っている。</p>

## 学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

一般入試においては、キリスト教神学・伝道者コースの募集も行っている。入学時に本人がいずれかのコースを選択可能な制度となっている。  
なお、2008年度入試より一般入試において新たな入試制度を導入するとともに、各入試種別における募集定員の見直しを行った。結果、AO入試の募集定員は10名となっている。今後、志願者動向等について注意深く検証していく。  
また、在学生に対するアドバイザー制度を検討中であり、基礎学力の担保や退学希望者へのより細やかな対応を行っていくことを考えている。

## 学内第三者評価

全体として、入試目標・入試対象などはしっかりと捉えられている。推薦学生の依頼範囲をキリスト教関係者・団体に限定することなど、選抜範囲を広げるように今後の改善が期待されることもある。  
従来の各種入試をAO入試に一括して、一般入試との2本立てとする改革を行ったようであるが、帰国生徒・外国人留学生などで見えていた特徴は外部から見えにくくなった面もあり、効果について時間はかかるが検証が望まれる。

AO入試の募集定員15名に対して志願者数が19名(2004年)、13名(2005年)、11名(2007年)と減少していること、退学者数が5名(2002年)、7名(2003年)、4名(2004年)と比較的大きい数字であることが検討の対象である。

AO入試合格者の基礎学力の担保については、入学後に補習授業を実施することなどを検討してもよい。  
外国人学生は学部段階では少ない。確保のためには海外の協定大学との間で交換留学生制度を推進することも考えられる。

なお、特別委員からは以下の意見があった。  
・「伝道者や社会に奉仕できる人材の育成には、幅広い学修や入学者の多様性が必要であり」、そのために多様な入試方法の導入などを進めている。これらの施策の有効性を検証することが望まれる。